

【共同研究】

女子高校生と両親の「父・母・子ども・自分」に
対する認知・態度の変化

－ 転機を中心として－

本田時雄・大熊保彦・白井三香子

Some Changes in Cognition and the Attitudes of
Girl High School Students and Their Parents
toward Father, Mother, Child, and Self

Tokio Honda, Yasuhiko Okuma, Mikako Shirai

Up to now, we have advanced the research concerning the turning point. We assume that it is a change in cognition and attitude that is brought by the turning point. We investigated the girl high school students and their parents about the changes in the cognition and attitude of the father, the mother, the child and the self. In this paper we reported the results of asking when, why, and how they changed their cognition and attitude to each object.

This report consists of two parts. The first is the making process of the coding system used to analyze their responses. The second is the results of the analysis by using it. The coding system in the previous studies, consisted of two parts. One was applied to Why (reason) question and the other to How (*aspect*) question. But the coding system designed here is constructed for both questions. The new coding system is mainly constructed with three areas ; developmental, accidental and psychological. In the model of the turning point, it is assumed that changes of the cognition and attitude mainly depend on developmental or accidental trigger. However, some of the respondents answered that a certain change in the cognition and attitude brought another change in the cognition and attitude.

The following results were obtained by analyzing our data with using the coding system designed here. Mothers reported more changes than others. Parents were inclined to point out developmental as a reason for the change concerning each object. However, the students were inclined to point out accidental trigger. These results seemed to reflect the position of the life course, and more data and much consideration should be needed in the future researches.

はじめに

1. 転機について

論を進めるにあたって、最初に転機について若干考察し、関連する用語について定義しておきたい。

転機については、森岡・他(1987)が「個人のライフコースを方向づけたり、その方向を転換させたりする、いわば分岐点となる出来事」と定義している。これは、出来事およびその性質に力点を置いた定義であるといえようが、我々の関心は転機の心理的側面にある。森岡らの定義に即していうならば、「ライフコースを方向づけたり、転換させたりする」ことを可能にした心理的背景に関心がある。

我々はこの「心理的背景」について次のように考える。

ある「出来事」が起こり、それがライフコースを方向づけたとしよう。例えばディケンズの有名な小説「クリスマス・キャロル」では、クリスマスの晩に吝嗇で無慈悲なスクルージのもとに精霊が訪れ、様々な光景を見させるという「出来事」によって、スクルージは慈悲深い紳士に変わった。これはスクルージにとってはまさに転機であるといって差し支えないだろう。このとき、スクルージに起きた変化は、行動や物腰については慈悲深い紳士への変身として表現されようが、根本的には彼の世界観や価値観の変化として見ることができよう。スクルージは「この世界で重要なのは金銭ではなく、一口でいえば愛情なのだ」と、その世界観・価値観を変化させたといえる。世界観や価値観の変化が、行動レベルでの彼の変化をもたらしたと考えるわけである。

このように我々は、ライフコースの方向を決定づけるのは対象世界に対する観点やその変化にあると考え、そこに関心の中心を置いている。「対象世界に対する観点」を心理学的に「認知・態度」と言い換え、そこに重点を置くことを強調するために、我々は転機を

「認知や態度が不連続ないし比較的短時間に变化する現象」と、とりあえず定義しておきたい。なお、この定義については若干の補足が必要であると思われるので、それについて以下に述べる。

2. 転機に関連する諸側面

転機を出来事ではなく『現象』としたのは、転機は様々な要素から構成されており、その側面から記述できるし、記述する必要があると思われたからである。我々はその諸側面を次のように考えている。

時期：特定の対象に関する認知や態度は、一貫性を保ちながらもしばしば変化するものである。その変化については、連続的で漸進的变化と、不連続で急激な(少なくとも比較的短期間の)変化を概念的に区別できるが、我々は後者の変化だけを「転機」と呼ぶこととする。つまり、転機の特徴として、単なる変化だけでは不十分であり、その不連続性ないし突然性が認識されていなければならないとした。

この場合の不連続とは、典型的に「ある時を境にして」など、変化の時点をはぼ特定できることをいう。このように、基本的な考え方は変化が起きたのは時間の中の一点とするものであるが、それは文字どおり瞬間から、場合によっては数年にわたることもある。後者の例としては、「欧州滞在を転機として…」という「転機」も考えられる。さらにこの例が示すように、転機の時期が出来事として表現されることもあるが、いずれにしても、時間軸の一点として指摘できることに違いはないと考える。

契機：転機をもたらした具体的な出来事のことである。森岡らの定義のように、狭義にはこれをもって<転機>とすることもある。

様相：変化後の認知・態度のありようである。これには、質的な側面と量的な側面がある。質的な側面は例えば、好きになった、尊敬するようになった、(対象が存在する)意味を見いだした、空しいものだと思った、などと表現される。すなわち認知・態度の内容といっ

てもよいかもしれない。ただし、必ずしも単純ではなく、時にはアンビバレンツな感情や錯綜した思いが含まれることもある。

量的な側面は、内容そのものは変化の前後で変わらないが、その程度の変化である。例えば、…であることに気づいた、ますます…になった、あまり気にならなくなった、などの表現に見られるように、意識化されたり確信的になったり、思いが強まる（弱まる）場合のことである。

I. コードの作成過程

今回分析の対象とするのは、『父、母、子ども、および自己』に関する見方の変化（転機）についてである。質問紙では、「転機の時期（何才頃）」、「なぜ変化したか」、「どのように変化したか」について、自由記述法を用いて回答を求めた。これらは、前述の時期、契機、様相にそれぞれ対応している。分析にあたっては、変化の契機、様相に特定のコードを与えることが必要であるが、ここではコード作成の過程について略述する。

1) これまでのコード体系の見直し

我々が前報告（本田・他、1992）で使用したコード体系はTable 1に示したとおりである。この体系の骨格は、①契機の種類は発達の契機、偶発的契機、その他が基本であること^{*}、②様相の種類は、親に対するものが中心であること、であった。このコード体系には、いくつかの限界があった。

契機についていえば、そこで挙げられた項目は質問に対する回答から帰納的に構成されたものであり、必ずしもライフコースの全体イメージを俯瞰して作成されたものではない。したがって、そこで挙げられた項目では、ライフコース全体を記述することはできず、汎用性に欠けていて、今回および将来の研究に

も応用しにくいことは明らかである。

Table 1 従来のコード体系

契機
•発達の契機 成長、入学、定年など、自分自身に関する契機と親に関する契機で合計8分類
•偶発的契機 病気、離婚など、自分自身に関する契機と親に関する契機で合計10分類
•その他の契機 否定的出来事、親の肯定的行動など5分類
様相（親に対する認知・態度）
肯定的
親として
夫として
男性として
人間として
弱者として
中性的
※上と同じ
否定的
※上と同じ
親との関係の変化5分類

様相についていえば、前回のコード体系は親に関する認知・態度の項目に限定されており、今回および将来の分析にあたっては、親以外の対象（自己、子ども）にも拡張する必要があった。

そこで、今回はそうした限界を解決すべく新たにコード体系の試案を作成した。

2) 新コード体系の作成

以上に述べた諸点を考慮して、新しいコード体系の作成を試みたのであるが、作成の段階でその他にもいくつか考慮すべき諸点が見いだされたので、そのことにも触れつつ新コード体系について述べる。

なお、コードを作成するには、得られた回答の記述内容を概観してそこから共通項を見いだしていく帰納的な方法と、記述内容とは独立して対象領域の全体像を考慮しながらコード体系を考案する演繹的な方法の2つがあ

* 1. 親などに対する態度・認知の変化を含む人生の転機となるような事件や出来事は、発達の契機と偶発的契機の二種類に大別できるだろう。前者は、人生において誰もが体験する、あるいは体験すると社会的に期待されており、多くの場合にある程度予測することが可能な事柄である。例えば、入学、就職、結婚、子の誕生、親の死などが含まれる。後者は、予測できない事柄で、転居、転職、離婚、災害、病気などが含まれる。

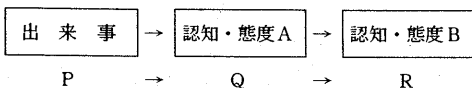
りうる。実際には、この方法の2つは相互作用に関係しており、相対立するものではない。我々の場合も、この2つの方法を併用することで、コード体系を作成した。

回答からの接近

「なぜ変化したか」という問いでは、前述したように転機の契機に関する回答を期待したのであるが、しかし実際には、我々が企図したとおりの回答の他に、転機の様相に相当する記述が契機として挙げられる例も少なからずあった。例えば「なぜ」に対する回答として「父親も欠点のあるひとりの人間だと思った」と記述され、「どのように」に対して「いたわらねばと思った」が記述されるといった具合である。我々の考えでは「父親も欠点のあるひとりの人間だと思った」というのは、父親に対する認知であり様相に属するものであって、契機として指摘されるとは考えていなかった。むしろそれがどのような事件や出来事をきっかけにして形成されたのかの回答を期待していたのだが、この例は、そうした我々の意図に必ずしも合致するものではなかった。

このような例が少なからず存在したのは、回答者の因果帰属の問題として考えることができる。それはFIG. 1に示すとおりで、我々の意図は、 $P \rightarrow Q$ といった関連に向けられていたのだが、回答者はそれ以外に $Q \rightarrow R$ という関連をも指摘したといえる。すなわち認知・態度Aは、ある出来事によってもたらされた変化であると同時に、次の認知・態度Bの契機として意味づけされるのも可能だとい

FIG. 1 転機のシーケンス



ことである。この場合、回答者にとっては認知・態度が変化するきっかけとなった具体的な出来事はさほど重要でなかったか、日常のほんの些細なものだったか、あるいはそれ故記憶に残っていなかったか、なのであろう。それよりも変化それ自体のほうがより印象的であったかもしれない。であるとすれば、そうした回答者の認知的な枠組みを尊重すべきであるとして、我々は、認知・態度も契機としてとりあげることにした。^{*2}

理論的な接近

概念的には、契機と様相を分けることが可能であるが、前述の例のように、契機は具体的な出来事だけではなく、認知・態度の変化も含めて考える必要があることがわかった。そこで、契機と様相について別のコード表を用意するのではなく、共通のコード表を用いながら、コードの上である程度契機と様相を区別することとした。すなわち、我々が当初意図していた具体的な出来事を表現するコードと、認知・態度を表現するコードの両者を含んだコード表を用意することにした。^{*3}

契機のコード化

我々が仮定している契機は、これまでふれたように対象に対する認知・態度が変化するきっかけとなった具体的な出来事である。コード体系としては、人生において体験される可能性のあるあらゆる出来事すべてを網羅するようにコードを設定しなければならないことが原則であるが、当然それは不可能であるし実際的でもない。そこで、前報告にならって、発達の契機・偶発的契機の2大分類を基礎にし、ライフコースを考慮しながらTable 2に示すような主領域を中分類として考えた。さらにその下に、小分類として、様相の説明としてあげた性的成熟・老化・受験・入学などをコード化した。

*2. したがって、契機の定義は、具体的な出来事に加えて認知・態度の変化や形成を含めた形に修正する必要がある。

*3. コード体系の基本構造は、大分類、中分類、小分類とし、大分類は100番台、中分類は10番台、小分類は1番台で表現することとした。

Table 2 契機となる主要領域

発達の契機

- ・成長・加齢にともなう主として身体的側面
(性的成熟, 老化など)
- ・教育にかかわる側面 (受験, 入学など)
- ・社会にかかわる側面 (就職, 結婚など)
- ・その他

偶発的契機

- ・親との関係にかかわる側面 (親と争ったなど)
- ・家庭・家族関係にかかわる側面
- ・人間関係にかかわる側面
- ・教育にかかわる側面
- ・社会にかかわる側面
- ・その他

認知・態度のコード化

コード化の基本的な構造は、認知・態度の対象である対象領域とその様相の2つの次元で構成した。領域はTable 3, 様相はTable 4にそれぞれ示したとおりで、領域を大分類、様相を中分類と小分類とした。

Table 3 認知・態度の対象領域

- ・自己
- ・子ども
- ・親
- ・家族・家庭
- ・人間関係
- ・社会 (職場, 学校を含む)
- ・環境, 物事全体

Table 4 認知・態度の様相

- | | |
|----------|--------|
| ・肯定的・受容的 | ・関心 |
| ・否定的 | ・決意・欲求 |
| ・中性的 | ・反省・後悔 |
| ・両価的 | |

対象領域は、質問の主旨からいえば自己・親・子で充分なのであるが、契機のコードとしても用いることが可能なように広範囲に設定された。というのも、前述したように、認知・態度の変化はそれ自体次の変化の契機として挙げられる場合があるからである。例

えば「世間とは厳しいものだ」という認知が形成されたことをきっかけにして、(その世間で生きてきた)「父親の苦勞がわかった」というパターンがそれである。これは、具体的な出来事を契機として父親に対する認知・態度が変化したのではなく、認知の変化がさらなる認知の変化をもたらしたとされた例である。

様相は、対象領域に関する認知・態度が変化した方向や形式に関する分類であり、基本的にすべての対象領域について設定されている。例えば、自己についての変化が、肯定的な方向か、単なる関心の出現か、といったことなどである。ただし、「子ども」領域については、「教育の大切さの自覚」が例外的に加わっている。また、対象領域によっては、様相はさらに下位分類を含むことがある。紙幅の関係ですべてを示すことはできないが、例えば「子ども」領域の否定的方向は、育児不安、子どもがわずらわしい、などの下位分類を含んでいるし、「親」領域では、それぞれの様相分類は、夫(妻)として、男(女)として、などの下位分類を含んでいる。

3) 将来的な分類

コード体系は、ただ単に整然としていけばよいというわけではない。それは、あくまである現象を構造的に把握するための道具である。今回の新しいコード体系をみると、必ずしも体系としての構成が整然としているとはいえないが、それはこうした理由による。今後新しいコード体系の適用を積み上げ、よりよい体系をめざしたいと考えている。

II. 作成したコードを適用したデータ解析

用いたデータは、大学・短大の付属女子高校1年生の生徒228人とその両親の、228組であった。調査は1991年3月に学校を通じて配付・回収した。

転機(対象に対する認知・態度の変化)が少なくとも1回以上あったと回答したのは、

全体で650例 (23.8%) であった。^{*4}

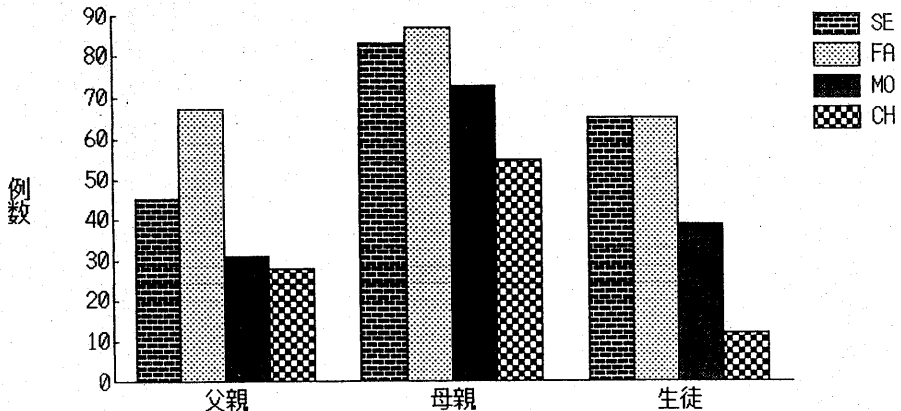
カイ二乗検定の結果, Table 5 に示したように有意に大であった ($\chi^2 = 20.231$, $df = 6$, $p = 0.002$). 母親は32.7% (298例) と最も多く, しかもいずれの対象に関しても最多であった. 他の2群は父親171例と生徒181例で20%弱であった. 転機に関する母親の回答が多かったのは, 認知や態度の変化が父親や生徒に比して実際に多いのか, もしくは物事に関する変化をより強く意識しているためであろうか. 一方対象に関して言えば, FIG. 2 に示されたように, 回答が最も多

かったのは「対父親 (以下FA)」が219例, 次いで「対自己 (以下SE)」が193例で最少は「対子ども (以下CH)」が95例であった. 三群いずれもCHに関する変化が少なく (特に生徒はわずか12例), FAに関する変化を多く認めている. SEに関する変化は, 父親が「対母親 (以下MO)」に関してと同様に他の二群よりも少なかったが, これは父親が自己を顧みる余裕が少ないことや, 日本の中年男性は自己表現において寡黙な傾向が強いことを示していよう.

Table 5

	1. 父親	2. 母親	3. 生徒	合計 (%)
1. SELF	45 (26.3)	83 (27.9)	65 (35.9)	193 (29.7)
2. FA	67 (39.2)	87 (29.2)	65 (35.9)	219 (33.7)
3. MO	31 (18.1)	73 (24.5)	39 (21.5)	143 (22.0)
4. CH	28 (16.4)	55 (18.5)	12 (6.6)	95 (14.6)
合計	171(100.0)	298(100.0)	181(100.0)	650(100.0)
カイ二乗値 (自由度)	20.23064 (6)		有意確率0.002519	
クラメールの関連係数			0.124748	

FIG. 2 全体



* 4. 228組の親子がそれぞれ対自己, 対父親, 対母親および対子どもの4つの対象に関して回答を求められた. すなわち全体数228 × 3 × 4例.

以下の解析では「成長・発達の」「偶発的」および「心理的」の順に3カテゴリーで行い、次いで細かいカテゴリー（100）にしたがって解析を行った。

①父親；1回目

SE：変化の契機としては「成長・発達の契機」が50%、「偶発的契機」が25%、他は「心理的契機」（否定的変化と環境・事物全般に対する見方の変化）であった。変化の様相としては「成長・発達の」「心理的变化」で、後者の内訳は肯定的・受容的变化や決意・欲求、家族・家庭・生活に関する決意・欲求および人間関係に対する肯定的・受容的变化であった。

FA：契機は「成長・発達の」が30%、「偶発的契機」が49%で、他は「心理的契機」であるが、それには「教育・しつけの大切さの自覚」「親に対する見方の変化」が含まれていた。変化の様相は「心理的变化」しかなかった。細かくみると「親の見方の肯定的変化」が60%できわめて多く、次いでずっと減少して「親の見方の否定的変化」が20%であった。具体的には、「親との関係の変化」や「成長・発達」によって親の見方が好転した。

MO：「成長・発達の契機」が75%ときわめて多かった。残る25%は「偶発的」（親子関係の変化）であった。変化の様相はFAと同様に「心理的」のみであった。詳しくは「肯定的・受容的」が50%と多かった。

CH：頻度が2しかなく、「成長・発達の契機」や「心理的契機」によって子どもに対する見方が変化していた。

②父親；2回目

SE：契機として「成長・発達の」が62.5%、「偶発的」が37.5%であった。変化の様相は「心理的」なものだけで、内訳は「環境・事物全般に自己に関するもの」37.5%、「自己に関するもの」と「社会に関するもの」がともに25%であった。

FA：契機は「成長・発達の」が52.4%、「偶発的」が42.9%であった。変化の様相は「心

理的」なものだけで、詳しくみると「親に対する肯定的・受容的」な変化が52.4%で「否定的・拒否的」なものはずか9.5%だった。

1回目と比較するとFAに対する見方の変化は「否定的」が20%から9.5%と半減し、「反省・後悔」がやや増加していた。

MO：変化の契機は「成長・発達の」が75%、残りは「偶発的」なものだった。変化の様相は心理的なもので、「肯定的・受容的」（75%）と「反省・後悔」のみであった。

CH：契機は社会に関わる発達のなもの（66.6%）と、子どもの変化に関するものだけであった。変化の様相はCHに対する「肯定的・受容的」および「両面的」の変化66.6%であった。以上いずれもカイ二乗検定の結果は有意に大でなかった。

③母親；1回目

SE：変化の契機としては「成長・発達の」が61.6%（特に社会的発達に関しては38.5%）、「偶発的」は34.5%であった。変化の様相は自己に関する「心理的」なものが80.7%、人間関係に関わるものが7.6%だった。

FA：契機は「成長・発達」に関するものが56.5%で「偶発的」が43.3%であった。変化の様相は「心理的变化」で、親に関するもの（73.9%）、家族に関するものおよび自己に関するものそれぞれ8.7%であった。

MO：変化の契機は「成長・発達の」が65%、「偶発的」が25%、「心理的」が10%であった。様相は親に関する「心理的变化」が90%と圧倒的に多かった。

CH：契機としては「成長・発達の」が57.2%で、他は「心理的」42.9%であった。変化の様相は当然であるが、CHに関する心理的变化が85.8%であった。

④母親；2回目

SE：変化の契機としては、「成長・発達の」が64.4%（特に社会に関わるものが53.6%）、「偶発的」が28.6%であった。変化の様相はすべて「心理的」であり、自己に関するものが89.2%と多かった。

FA：契機は「心理的」が63%、「偶発的」が

37%であった。変化の様相は96.3%が「心理的」なもので、特に親に関するものが77.7%ときわめて多かった。カイ二乗検定の結果有意に大であり、 $\chi^2 = 73.212$, $df = 40$, $p = 0.001$ であった。すなわち、社会に関する成長・発達によって、FAに対する態度・認知がプラスに転じた。

MO: 契機は「成長・発達の」と「偶発的」がちょうど50%ずつであった。中では社会に関する発達が40%と突出していた。変化の様相はすべて「心理的」変化であったが、中でも、MOに対する好意的変化は60%と非常に大であった。カイ二乗検定の結果が有意に大きかった ($\chi^2 = 40.833$, $df = 25$, $p = 0.024$)。すなわちここでも社会に関わる成長・発達によってMOに対する態度・認知がプラスに転じたと考えられる。

CH: 契機は「成長・発達の」が87.5% (特に社会に関わる発達が50%) で、残りは「偶発的」であった。変化の様相はすべて「心理的」で、特にCHに対する見方が好転した者が62.5%いた。

⑤生徒; 1回目

SE: 契機は「成長・発達」が41.7%で、「偶発的」が41.6%と拮抗していた。他は「心理的」な契機であった。変化の様相に関しては、すべて「心理的」な変化で、自己に関するものが74.9%、人間関係に対する見方が25.1%であった。

FA: 変化の契機は「偶発的」なものが53.9%、「成長」と「親に対するマイナスの心理」がともに23.1%であった。変化の様相としてはFAに対する見方の変化だけで、ここではマイナスの変化が76.9%、プラスの変化が23.1%と、マイナスの変化が3倍弱も多かった。

MO: 変化の契機は「偶発的」が83.4% (特に親との関係に関わるものが50%) で、他は「成長」に関するものであった。様相に関しては「心理的」がすべてで、FAの場合に比べマイナスの見方がプラスの見方を大きく上回っていた (83.3%対16.7%)。

CH: 反応は1例のみであった。高校生はまだ

CHに関しては確たる意見・認知がないのか、あるいは意識されるほどの顕著な変化はまだおこっていないのかもしれない。

⑥生徒; 2回目

SE: 変化の契機は「成長・発達の」が60% (社会に関わるものが40%)、「偶発的」が10%、「心理的」が30%であった。変化の様相はすべて「心理的」であり、自己に関わるものが70% (肯定的なものが50%)、人間関係に関わるものが20%であった。

FA: 変化の契機としては、「偶発的」が38.5%、「成長」が30.8%、そして「心理的」が23.1%であった。変化の様相はすべて親に関する心理的なもので、「肯定的・受容的」が30.8%、「否定的」と「中性的」がともに23.1%であった。1回目に比して「否定的」な変化は大幅に減少していた。

MO: 契機として「成長・発達の」は皆無で、「偶発的」が66.8%、「心理的」が33.4%であった。変化の様相は「心理的」がすべてで、親に関わるものが83.8% (ネガティブなものが50%) であった。これも1回目の83.3%に比べれば、ネガティブな変化は約60%に減少していた。

CH: 1回目と同様に1例のみであった。

変化の契機に関しては、前回の研究 (本田・他, 1992) カテゴリーとほぼ等しいので比較してみると、FAおよびMOに対する認知・態度の変化の生徒の契機は、今回の場合「成長・発達の」なものは多くなかった。しかし父親や母親の反応は、「成長・発達の」なものが前回と同様に多かった。変化の様相に関しては前回と比較できないが、「心理的」が非常に多く (9/12)、他のカテゴリーが出現したのはSEに対する父親の1回目と、FAに対する母親の1回目および2回目だけであった。最初と最後に「成長・発達の」が、そしてFAに対する母親の1回目に「偶発的」が現れていた。

前回の結果と比較してみると、契機に関しては前回とほぼ等しいが、変化の様相に関し

ては対象が前回と異なるので直接には比較できなかった。前回は今回のカテゴリである「心理的」だけを用いたが、今回は父親の1回目と、母親の1回目および2回目が「心理的」以外のカテゴリの様相を示した。すな

わち父親は「対自己」に関して「成長・発達の」、母親は対父親に関して1回目は「偶発的」、2回目は「成長・発達の」の様相をも示した。

FIG. 3 全 体

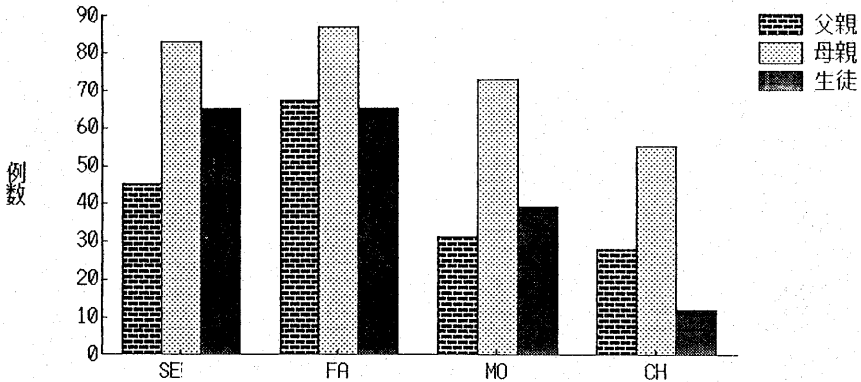


FIG. 4 父親の1回目の変化の契機

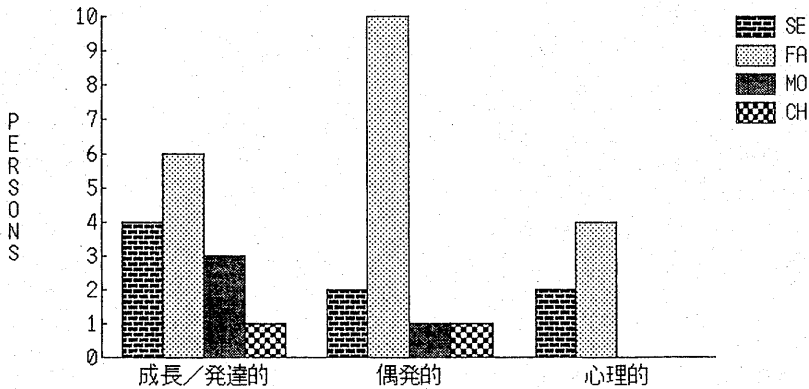


FIG. 5 父親の2回目の変化の契機

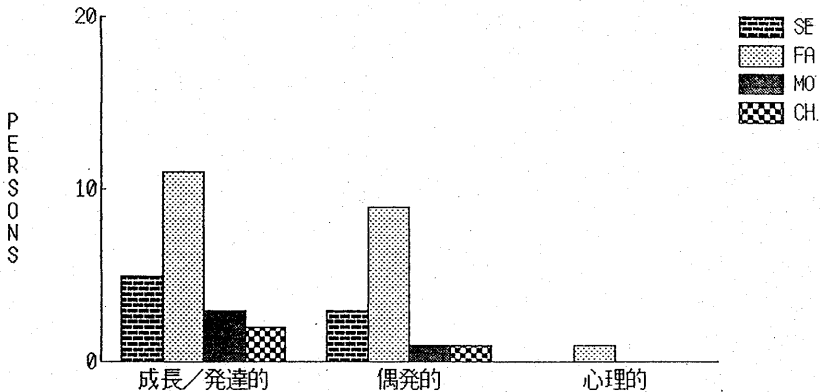


FIG. 6 母親の1回目の契機

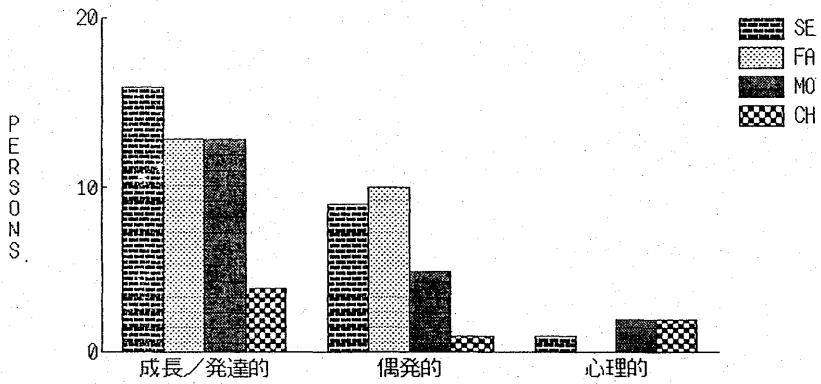


FIG. 7 母親の2回目の変化の契機

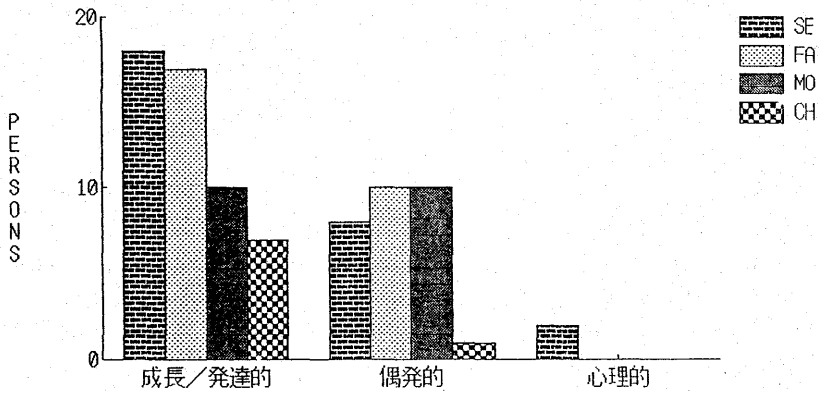


FIG. 8 生徒の1回目の契機

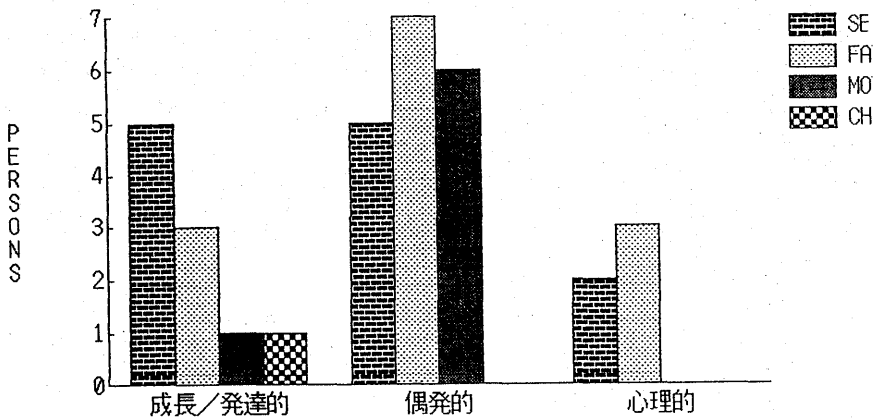
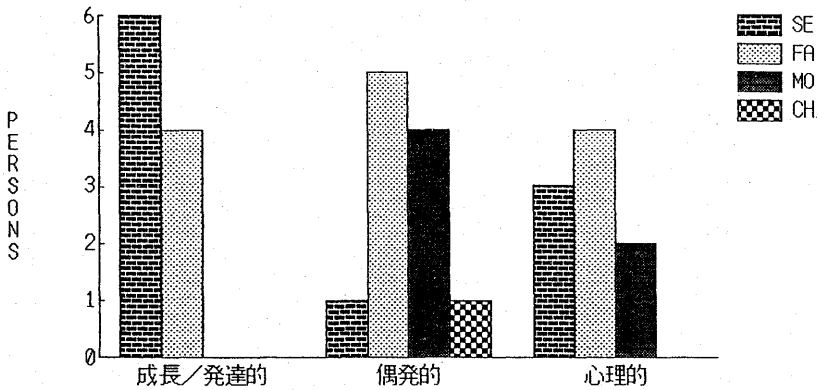


FIG. 9 生徒の2回目の契機

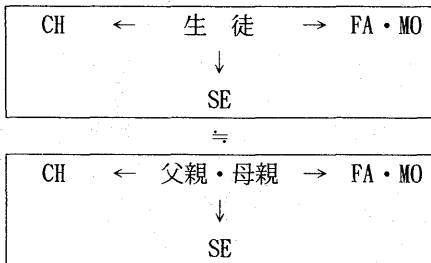


おわりに

以上のように、改訂したコーディングマニュアルの有効性は一応認められたと考えることができよう。次の段階では、データの数をもっと増加することが必要であろう。現在女子高校生とその両親のペアデータも徐々に蓄積されつつある。

今後の研究の展望としては、次のようなことが挙げられる。

1. 今回は生徒・父親・母親と三者を独立に分析したが、本来ペアデータの意図は生徒とその両親という家族ダイナミックスのパターン化による分析である。
- 2.



のような図式において求められる関係性を適切なデータの増加によって解明できよう。

3. 調査項目には、転機を規定する要因としての父親・母親・子どもおよび自己に関する実態や意識を問うているものが含まれるので、それらを絡ませた解析が早急に必要である。
4. このような研究はアメリカの研究者との共同研究に始まったので、再度アメリカやその他の国との共同研究を行いたい。

参考文献

1. 本田時雄・ヨシミツタケイ・白井三香子・大熊保彦 (1991) 『子どもに対する日本・アメリカの青年の認知・態度に関する交差比較的研究』 文教大学人間科学部紀要第13巻PP89-100
2. 本田時雄・ヨシミツタケイ・白井三香子・大熊保彦 (1992) 『日米大学生の比較研究(2)』 文教大学人間科学部紀要第14巻PP78-87
3. 齊藤勇 (1990) 『対人関係の心理学』 誠信書房
4. 森岡清美・青井和夫・編 (1987) 『現代日本人のライフコース』 日本学術振興会